

歴史は未来の羅針盤

温故知新

これまでに刊行しました『近江日野の歴史』は、第一巻「自然・古代編」、第二巻「中世編」、第三巻「近世編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」、第七巻「日野商人編」、第八巻「史料編」となりました。教育委員会や各公民館などにおいて、一冊四、〇〇〇円で好評販売中ですので、ぜひともお買い求めください。

『近江日野の歴史』第三巻「近世編」を発売して以来、江戸時代の日野の姿を様々な視点から紹介しています。今回は日野の文芸についてとりあげてみましょう。

文字文化の広まり

江戸時代は、生活の多くの場面で文字が使用されるようになった時代でした。村役人から領主へ届けを出すなど文書でのやりとりはもちろんのこと、文芸を楽しむ場面でも使用されました。

また、江戸時代には、出版文化が花開いた時代でもあり、多種多様なジャンルの本が大量に生み出され、様々な階級の人たちへと文字文化が広まってきました。

日野にも、和歌・漢詩・狂歌・俳諧といった詩歌、洒落本・合巻などの文学、能・歌舞伎・浄瑠璃などの演芸、茶の湯・いけばななどを楽しんだことがうかがえる史料が多く残っています。

これらの中から、俳諧を親しむ日野の人たちの姿をのぞいてみましょう。

日野の俳諧

日野における俳諧の楽しみ方は、広い地域から、地元の仲間うちでの交流といったようにその形は様々だったようです。

広い地域にわたって楽しまれた例として『富士発句集』があります。この句集は、近江の俳人の黄蓉吞湖が企画・出版を行なった天保三（一八三二）年の序文をもつ俳諧句集です。

黄蓉吞湖が富士登山をした時、竜の形をした奇岩を見つけたというので、当時の奇岩愛好ブームにのって、富士山に関する俳諧の投句を広く募って編さんされました。

句集には、加賀・三河・尾張・伊勢・志摩・駿河・近江といった地域の俳人の句が入首しています。

す。

俳人の在所の中には「ヒノ」「コタニ」「仁正寺」「テラジリ」と日野地域の地名が記されているものがあり、日野の俳人の句が入首していたことがわかります。

入首の「コタニ」の俳人は既白・松涛・里角・陸丸・蝸牛・里居・菊雄・蟠龍・一枝・葛美の十名で、彼らは、このように広い地域の人たちと俳諧を楽しむ一方で、地元の間内でも俳諧を楽しんでいた。

吉村儀兵衛家には、そのことを示すように、俳諧が詠まれた短冊が数多く残っていました。

吉村儀兵衛は、小谷出身で、栃木県や茨城県に、複数の酒造の店を構えた日野商人でした。吉村

家には、商売に関する史料以外に、このような文芸に関する史料も残っています。

先ほどの『富士発句集』に載っていた「コタニ」の俳人である既白・松涛・陸丸・里居・蟠龍・菊雄・葛美らが詠んだ俳諧も残されています。左に載せた、既白が吉村儀兵衛に送った句の題に、「吉村松涛君」とあることから、松涛は吉村儀兵衛の俳号であったようです。

彼らが残した短冊の句の題材をみてみると、還暦および古希祝・結婚祝・子孫誕生祝・昇進祝・代譲りの祝・入店の祝・別離・追善供養・春夏秋冬・花鳥風月など、様々です。仲間同士の間で、句を詠み合い、慶びや悲しみなどの感情を共有していたことでしょう。

小谷の俳諧サークルのように、日野の人たちは、さまざまな形の交流の中で、文芸を楽しんでいました。



▶既白が吉村儀兵衛に送った祝いの句「代々みどり名だかき松となりけり」

人名等読みが定かでないものはふりがなを書いていません。